

26年漁期 すけとうだら漁獲可能量(TAC)案について

資料2-5

(単位:万トン)

魚種	系群	資源状態		ABClimit					TAC				備考
		水準	動向	23年	24年	25年	26年(案)	漁獲シナリオ(管理基準)	23年	24年	25年	26年(案)	
すけとうだら	<p>【中期的管理方針】 日本海北部系群及び太平洋系群については、近年の海洋環境等が資源の増大に好適な状態にあるとは認められない。このため、資源水準の低下が顕著となっている日本海北部系群については、資源の減少に歯止めをかけることを目指して管理を行うものとし、資源管理計画に基づく取組の推進を図るものとする。太平洋系群については、一定の親魚量を確保することにより資源水準の維持を基本として、漁獲動向に注意しつつ、管理を行うものとする。</p> <p>その他の系群については、ロシア連邦の水域と我が国の水域にまたがって分布し、同国漁船によっても採捕が行われていて我が国のみでの管理では限界があることから、同国との協調した管理に向けて取り組みつつ、当面は資源を減少させないようにすることを基本に、我が国水域への来遊量の年変動にも配慮しながら、管理を行うものとする。</p>												
	日本海北部	低位	減少	0.71 (0.67)	0.77 (0.78)	0.76 (0.65)	0.65	親魚量の増大 (4)	1.3	1.3	1.3	1.3	<p>【26年TAC設定の考え方】 【日本海北部系群】資源が低位で減少傾向にあるが、スケトウダラへの依存度が高く漁業経営上極めて厳しい状況にあることを踏まえ、TAC(案)を25年漁期と同量の13,000トンとする。なお、厳しい資源状況の中、資源回復を図るため、資源管理措置を一層推進する。</p> <p>【オホーツク海南部】主たる生息水域がロシア水域にあることから、来遊状況が良好な場合に対応できる数量として、近年の最大漁獲量である24年漁期の52,023トンをベースに、TAC(案)53,000トンとする。</p> <p>【根室海峡】主たる生息水域がロシア水域にあることから、来遊状況が良好な場合に対応できる数量として、近年の最大漁獲量である23年漁期の19,115トンをベースに、TAC(案)20,000トンとする。</p> <p>【太平洋系群】25年度の資源評価において、資源状態は中位にあるものの減少傾向とされたが、本系群については、資源量が安定的に推移してきたことや漁場形成が毎年大きく変動することによる漁業経営への影響等を勘案し、TAC(案)を前年と同量の171,000トンとする。ただし、25年漁期に北海道に先行利用10,000トンを配分していることから、先行利用の漁獲実績に応じてTAC数量を減じる。</p> <p>※TACの管理期間は、「4月～翌年3月」</p>
	オホーツク海南部	中位	増加	-	-	-	-	-	2.8 (5.2)	3.7 (5.9)	5.2	5.3	
	根室海峡	低位	横ばい	-	-	-	-	-	1.1 (2.6)	1.2 (2.0)	2.0	2.0	
	太平洋	中位	減少	14.9 (19.5)	15.2 (17.9)	16.6 (18.0)	15.7	10年間、親魚量をBlimit以上に維持 (4)	16.7 (18.7)	17.1 (18.8)	17.1 (18.0)	17.1	
合計								21.9 (27.8)	23.3 (28.0)	25.6 (26.5)	25.7		

注1)オホーツク海南部及び根室海峡は、詳細な生態や資源状況が不明なことから、ABCの算定を行っていない。

注2)太平洋は、23年、24年及び25年に先行利用(各1万トン)の配分を実施。(23年、24年の利用実績はなし)

注3)ABClimit欄下段()書きは、再評価又は再々評価の数量。TAC欄下段()書きは、先行利用分を除いた期中改定後の数量。

資源評価結果

すけとうだら	資源の状態		資源量(親魚量)の状態	漁獲シナリオ(管理基準)	2014年漁獲量(千トン)	評価			2012年親魚量	Blimit
	水準	動向				10年後にBlimitへ回復する確率	10年後に2006年度親魚量を上回る確率	10年後にBbanを下回る確率		
日本海北部系群	低位	減少	<Blim	ABClimit					47千トン	140千トン
				*① 親魚量の増大(10年でBlimitへ回復)(Frec10yr)	0.2	40%	100%	0%		
				*② 親魚量の増大(20年でBlimitへ回復)(Frec20yr)	3.4	6%	97%	0%		
				*③ 親魚量の増大(30年でBlimitへ回復)(Frec30yr)	4.6	3%	88%	0%		
			*④ 親魚量の増大(わずかでも親魚量を増大)(0.9Fsus)	6.5	1%	63%	1%			

すけとうだら	資源の状態		資源量(親魚量)の状態	漁獲シナリオ(管理基準)	2014年漁獲量(千トン)	評価		2012年親魚量	Blimit
	水準	動向				5年後にBlimitを維持する確率	10年後にBlimitを維持する確率		
オホーツク海南部	中位	増加	—	—	—注1	—	—	—	未設定
根室海峡	低位	横ばい	—	—	—注2	—	—	—	未設定
太平洋系群	中位	減少	>Blim	ABClimit				305千トン	151千トン
				*① 経験的に適度な漁獲圧による漁獲(F30%SPR)	109	100%	100%		
				*② 現状の漁獲圧の維持(Fcurrent)	120	100%	100%		
				*③ 資源量の維持(Fsus)	144	100%	92%		
			*④ 10年間、親魚量をBlimit以上に維持(1.4Fcurrent)	157	95%	54%			

注1)オホーツク海南部については、当資源は、成長の一時期にオホーツク海南部水域を利用していると推測され、当海域に限定したABC算定は困難であることから、ABCの算定は行っていない。

注2)根室海峡については、既存の情報からは資源量の算定が困難なことから、ABCの算定は行っていない。

注3) *のついたシナリオが中期的管理方針に合致する。

26年漁期 するめいか漁獲可能量(TAC)案について

(単位:万トン)

魚種	系群	資源状態		ABClimit					TAC				備考
		水準	動向	23年	24年	25年	26年 (注2)	漁獲シナリオ (管理基準)	23年	24年	25年	26年 (案)	
するめいか	<p>【中期的管理方針】 高、中位にある資源が海洋環境の変化により大幅減少に転じる可能性があることから、資源動向の把握に努めつつ、海洋環境条件に応じた資源水準の維持を基本方向として管理を行う。資源水準の変動に際しては、関係漁業者の経営への影響が大きくなりすぎないように配慮を行うものとする。</p>												
	冬季発生	中位	減少	25.1	27.1	25.1	19.3	親魚量の維持(②)					<p>【26年TAC設定の考え方】 冬季発生系群及び秋季発生系群について、中期的管理方針に則して、ベースとするABCを漁獲シナリオ②の「親魚量の維持(冬季発生系群19.3万トン、秋季発生系群28.1万トン)」とし、これらの合計値に基づく47.4万トンから、韓国の直近5年平均の漁獲量17.3万トンを控除した30.1万トンをTAC数量とする。</p> <p>※26年漁期よりTACの管理期間を「1月～12月」から「4月～翌年3月」に変更する。</p>
	秋季発生	高位	減少	31.7	38.6	39.7	28.1	親魚量の維持(②)					
合計			56.8 (29.7)	65.7 (33.9)	64.8 (32.9)	47.4 (30.1)		29.7	33.9	32.9	30.1		

(注1) 23年のABClimit欄は再評価後の数量、TAC欄は期中改定後の数量。

(注2) 下段()書きについては、日本EEZの値。25年までは我が国EEZにおける漁獲割合から算出。26年は合計値47.4万トンから韓国の直近5年平均の漁獲量を控除して算出。

(注3) 26年のABCは管理期間を1月～12月から4月～翌年3月に変更し、再計算した値。

【資源評価結果】

<参考> Blimitと親魚量

	資源の状態		資源量(親魚量) の状態	漁獲シナリオ (管理基準)	2014年 漁獲量 (万トン)	評価		2013年 親魚量	Blimit
	水準	動向				5年後に現 状親魚量 維持する 確率	5年後に Blimitを維持 する確率		
冬季発生系群	中位	減少	>Blim	ABClimit ① 現状の漁獲圧の維持(Fcurrent)	16.8	67%	78%	24.0万トン	親魚量 18.8万トン
				*② 親魚量の維持(Fmed)	19.3	47%	60%		
秋季発生系群	高位	減少	>Blim	ABClimit ① 現状の漁獲圧の維持(Fcurrent)	15.1	78%	86%	53.6万トン	親魚量 39.9万トン
				*② 親魚量の維持(Fmed)	28.1	49%	66%		

注1) ABCは管理期間を1月～12月から4月～翌年3月に変更し、再計算した値。

注2) *のついたシナリオが中期的管理方針に合致する。

(参 考)

近年の韓国のするめいか漁獲実績 * 1

(単位:トン)

漁期年(平成)	冬季発生系群	秋季発生系群	合計
15年	83,602	159,934	243,535
16年	68,036	130,975	199,012
17年	64,966	122,657	187,623
18年	74,241	126,737	200,978
19年	75,429	92,892	168,321
20年	65,805	109,570	175,374
21年	69,690	114,881	184,571
22年	72,285	97,340	169,625
23年	100,111	79,182	179,293
24年	68,876	88,539	157,415

直近5年平均	75,353	97,902	173,256
平成26年ABC	193,000	281,000	474,000

* 1 : 日本EEZにおける韓国の漁獲は除く。

注1. 赤の数字は直近5年間の最大漁獲量

2. 青の数字は直近5年間の最小漁獲量